

基礎学力向上プロジェクト・英語寺子屋 2 年間の取り組み

(人文社会系分野) 竹山 友子、川尻 武信、富村 憲貴
(愛知教育大学) 江口 誠
(建築学分野) 佐々木 伸子

The Project for the Improvement of Basic Academic Ability: A Report on the First Two Years of “Eigo-Terakoya”—English Remedial Classes

(Faculty of Humanities and Social Sciences) Tomoko TAKEYAMA, Takenobu KAWAJIRI,
Noritaka TOMIMURA
(Aichi University of Education) Makoto EGUCHI
(Faculty of Architecture and Structural Engineering) Shinko SASAKI

Abstract

This is a report on the first two years of “Eigo-Terakoya”—English Remedial Classes. This is a main program of the Project for the Improvement of Basic Academic Ability at Kure National College of Technology. In order to improve students’ English ability, we offered extracurricular remedial classes named “Eigo-Terakoya” in the latter terms of the academic years 2009 and 2010. This program is targeted at first-year and second-year students who were thought likely to fail English classes. Based on the results of the first year implementation, we modified the program the next year. After the second year, more than 80 percent of the first-year students improved their results in General English I, while more than 70 percent of the second-year students improved in the subject of the same name. According to the questionnaire completed by the students, many respondents were satisfied with learning in Terakoya, and felt that they had progressed in English ability. Educational advisors (Terakoya teachers) also responded to the survey on teaching in Terakoya. The results show some problems, namely that Eigo-Terakoya cannot meet every demand of various students and only limited effects are to be expected. We also discuss the advantages and disadvantages in the case that a regular teacher, not a part-time teacher hired as an educational advisor, taught in the remedial classes.

Key Words: The Project for the Improvement of Basic Academic Ability, English Remedial Class, English language teaching at college, TERAKOYA
基礎学力向上プロジェクト、英語補習、高専英語教育、寺子屋

§1 はじめに

一般的に、高等専門学校（以下高専）に進学する学生は、普通科高校生よりも英語力が低いと言われている。¹ また、入学者間の学力差が年々広がりつつある傾向にあり、入学後に高専での勉強についていけず、学力不振に陥る学生への対応が緊急課題となっている。このような状況の中、本校では 2009 年度の重点項目として、学生生活の規律向上と基礎学力の向上、教育内容の見直しの取り組みが始まった。基礎学力向上においては数学、物理、英語の 3 科目が重点科目と位置づけられ、それぞれの教科において「基礎学力向上プロジェクト」の取り組みが開始した。本稿は英語科を中心に構成された「基礎学力向上プロジェクト英語部会」の主たる活動である「英語寺子屋」の実践結果を分析したものである。2 年間の取り組みの成果およびそこから浮かぶ課題を分析し、今後の活動につなげていくことを目的とする。

§2 これまでの取り組み

英語科では学生の英語力向上のために、また学生の英語学習環境改善のために、これまで様々な取り組みを行ってきた。近年実施している主な取り組みを表 1 に記す。これらの取り組みはすべて現在も継続中のものである。

表 1 英語科による取り組み事例

取り組み	効用他
e-learning の活用	教室授業との相乗効果および自宅学習の促進。
英語の多読「英語多読プロジェクト」	読書スピード向上・理解力向上・英文に対する意識変革、図書館との連携。
ノート・サブノート・課題チェック	英語学習の基本姿勢の指導、低学年に対するノートの取り方

	および辞書の使い方指導、課題チェックによる躓きの発見。
語彙力増強対策	副教材を用いた指導、定期的な語句テストによる確認。
個別補習	学力不振者に対して放課後に個別補習を実施。
夏季休暇中の課題	長期休暇中の継続学習のため、プリント課題等を実施。休み明けにテスト等で学習の確認。
国際交流授業	姉妹校ハワイ大学マウイ校と Skype を用いた交流授業および交流研修旅行の実施（引率）。
中国地区高等専門学校英語弁論大会参加・指導	出場者（スピーチ部門2名、暗唱部門2名）への個別指導および全体指導（引率）。
編入学試験対策	大学編入、専攻科進学希望者への個別指導。
資格試験実施	工業英検、実用英語技能検定の準会場として、外部受験者を含めた試験を指定日（週末）に開催。

英語科教員は基礎学力向上プロジェクト開始以前から以上のような取り組みを続けている。² 既に学力不振者への個別補習を実施している教員が多かったが、担任業務や各種委員会、クラブ指導など様々な校務に追われ、放課後に定期的には実施することは不可能であり、教員の労力負担が非常に大きいためきめ細かな指導を行うことは困難であった。また、教員による補習を行った場合、学生が授業よりも補習に依存する傾向が強くなるという問題が生じていた。

§3 2009年度（初年度）

3.1 対象と目標

上述の英語科教員による様々な取り組みを考慮した結果、学力不振に陥る学生への対応を目的とした「基礎学力向上プロジェクト」においては、学力不振者への個別補習を定期的に行うことが必要であるとの見解で一致した。英語は積み重ねを要する科目であるため、授業時間および単位数の多い1, 2年生を対象とするのが最善策と考え、前期末成績の結果から主に60点未満の欠点者を対象者とした。また、補習授業は学生が参加しやすいように「英語寺子屋」と名付け、講師は補習専門スタッフ（教育アドバイザー）を採用することとした。

3.2 実践方法

英語寺子屋は、対象者が1, 2年生の複数年にまたがるため、学年毎に隔週水曜日、15時30分から2時間開催した。後期から実施し、1年生は全7回、2年生は全6回の開講となった。対象者は1年23名、2年41名である。放課後の

実施で英語寺子屋を周知させるため、特にクラブ活動よりも寺子屋が優先であることを学内に周知徹底させるため、ポスターを作成して事前告知を行った。開講期間中はポスターを各教室内に常時掲示し、開講後1ヶ月間は電子掲示板での告知も行った。（図1）

教育アドバイザーは本校の現役非常勤講師および元非常勤講師の2名を採用した。教育アドバイザー1名に付き、各学年M・EとC・Aの2学科ずつ10~20人程度を1クラスとして開催した。³ 内容は総合英語IとオーラルコミュニケーションI（文法部分）の2科目の補習で、授業進度に沿った補習を行うため、英語科の各授業担当教員が毎回事前に授業進度表等で教育アドバイザーに進捗を連絡した。

図1 電子掲示板による英語寺子屋の開講告知

「英語寺子屋」開講します！

英語の基礎学力向上をめざして、後期より英語寺子屋を開講することになりました。寺子屋は無料かつ招待制です！招待された学生は、半年間寺子屋への参加が認められます（ただし、参加拒否はできません）。

1. 実施日
毎週水曜日（水曜振替授業日、定期試験直後を除く）

10月	7日[1]、14日[2]、21日[1]、28日[2]
11月	4日[1]、11日[2]、18日[1]
12月	2日[2]
1月	13日[1]、20日[2]、27日[1]
2月	3日[2]、10日[1]

[1]、[2]は寺子屋に招待される学年
1年、2年を隔週で交互に招待します

3.3 実践結果

3.3.1 効果

1年生は全7回、2年生は全6回開講したが、1, 2年生合わせた全体の出席率は75%だった。各学年の出席率に大きな差はなかった。各教育アドバイザーから提出された出欠表を部会責任者がまとめて教務主事へ報告し、教務主事から担任へ通知がなされた。一部の学生を除き、出席率はおおむね良好であった。

前期末評価と学年末評価の成績変化の分析によると、1年総合英語が約70%（23人中16人）、1年オーラルコミュニケーションが約61%（同14人）、2年総合英語が約78%（41人中32人）、2年オーラルコミュニケーションが約76%（同31人）の割合で、クラス平均と同等またはそれより良好な成績変化が見られた。

3.3.2 課題と2年目の活動に向けて

初年度の活動を終えた段階で、教育アドバイザーに英語寺子屋を実施して気づいた問題点を挙げてもらった。2名のアドバイザーともに欠席者対応と学習態度に関する問題を重要視していた。教育アドバイザーから指摘された問題点とその内容は表2の通りである。

表2 教育アドバイザーからの意見

問題点	内容
欠席者対応	<ul style="list-style-type: none"> ●欠席者に対する連絡手段がない。 ●クラブ活動を優先して欠席や遅刻をしてくる。 ●劣等感を抱いて欠席する学生もいるようだ。
開講時間	<ul style="list-style-type: none"> ●授業後の2時間は長く、疲れてしまう学生がいる。
学習態度	<ul style="list-style-type: none"> ●辞書やプリントなどを持ってこない。 ●学習以前に学習に臨むための基本的なことを指導する必要がある。
授業進度表	<ul style="list-style-type: none"> ●なるべく細かく、わかりやすい記述にしてほしい。書式を統一してほしい。

また、英語寺子屋に関して英語科教員側から指摘された問題点は表3の通りである。

表3 教員からの意見

問題点	内容
出席について	<ul style="list-style-type: none"> ●2週間に一度なので忘れる学生が多く、英語科教員や担任が毎回出席を促す必要がある。 ●欠席によるペナルティがないので出席を義務と思わない学生がいる。 ●寺子屋の出席率が悪い学生は、勉強以外の問題を抱えている。
補習内容	<ul style="list-style-type: none"> ●授業内容と寺子屋の補習内容が一致しないという意見を耳にした。 ●学生の意見を反映するためのアンケート調査を実施することができなかった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ●最終的に2科目とも単位を落とした学生は3名であるが、彼らは総じて寺子屋の出席率が悪く、みな勉強以外の問題を抱えているため、寺子屋では対応できない。 ●受講態度が真面目で出席率も良いが、どうしてもできない学生もいる。 ●対象者でない学生が希望したときの対応がはっきりしていなかった。 ●1年は各学科5名程度、2年は各学科10名程度が対象だったが、クラスサイズによって学生の寺子屋に対する

心理的負担や補習効果に違いがあるのではないかと。

出席者に対する心理的負担や補習効果の違いについては、基礎学力向上プロジェクトで2010年4月に新2年生全員を対象に実施した寺子屋に関するアンケート結果から推測することができる。アンケート項目の一つ「英語寺子屋出席の指名は恥ずかしいと思うか」の結果では、出席者の約59%が「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と答えている。指名されていない学生では約65%が同様の回答であった。また、「英語寺子屋の評価」の項目においては、出席者の約40%が「とても役に立った」または「役に立った」と答え、約60%が「あまり役に立たなかった」「役に立たなかった」と回答した。⁴

このアンケートは新2年生のみで新3年生には実施されていないため比較分析はできないが、この結果は前項3.3.1で述べた成績変化の学年毎の違いと関連すると推測される。2009年度の英語寺子屋対象者は1年生が1学科5名程度、2年生が1学科10名程度だった。1年生は少人数ゆえに対象者はクラスで学力的に最も下位に位置する学生となり、寺子屋出席を恥ずかしいと捉えた可能性が高い。さらに、学力的にクラスで最も下位に位置する学生は学習支援以上に睡眠障害や発達障害などで多方面の支援を必要とする場合が多く、寺子屋のような学習支援だけでは大きな成績向上を望むことはできない。その結果、成績変化(向上)の割合も2年生と比べて低くなったと考えられる。

学生アンケート結果および教育アドバイザーと英語科教員の意見を吟味した結果、初年度の取り組みで浮かび上がったこれらの問題点をできる限り改善して、2010年度も英語寺子屋を実施することに決定した。ただし、英語寺子屋はあくまでも基礎学力向上を目的とした学習支援であるため、学習支援で補うことのできない学生への対応は、英語部会ではなく学校全体または担当部署での検討をお願いすることにした。

§4 2010年度～2年目の取り組み

4.1 実践方法

2010年度では前年度の課題を改善しながら、ほぼ同条件で英語寺子屋を実施した。1,2年生を対象とし、後期からの隔週水曜日15時30分から2時間開講した。前年との大きな違いは、教育アドバイザー(1名)を当該年度の授業時間数が少なかった常勤教員(富村)が担当したことである。もう1名は前年度の教育アドバイザー(現非常勤教員)に再び依頼した。また、開催前日に毎回担任へ協力依頼メールを配信し、学生の出席を促すように心がけた。そして英語寺子屋出欠表を教務主事、担当主事補、英語科教員だけでなく、担任へも直接配信した。さらに、教育アドバイザーへ通知する授業進度表のフォーマットを統一し、進度

がすぐにわかるように改善した。

対象者については、前年度の問題点を検討した結果、1学年1学科5人程度が対象の少人数寺子屋では出席率および授業態度が改善されない傾向にあることが予測された。むしろ一定の人数を対象者としたほうがクラスにおける寺子屋の認知度が高くなり、お互い誘い合って出席する傾向があり、それに伴って指名される事に対する心理的負担が軽減し、成績も向上しやすいのではないかと考えた。その結果、1, 2年生すべて1クラス20人程度(1学年1学科10人程度)で英語寺子屋を開講することとした。対象者は前年度同様に前期末成績を考慮して決定し、最終的に1年生は39人、2年生は40人を指名した。⁵ 希望者も最初に出席登録をすれば参加できるようにし、実際に2年生の希望者1名が初回から最終回まで参加した。開講回数は1年生が全6回、2年生が全5回である。また、昨年実施できなかった受講者へのアンケートを最終回に実施した。

4.2 実践結果

4.2.1 効果

出席率に関しては、1年生は良好であったが2年生は専門授業の課題提出などでの欠席が目立った。特に建築学科2年の出席率は40%と悪かったが、ほぼ休まずに出席する学生と1度も出席しない学生で二極化していた。全体の出席率は1年生が約73%、2年生は約58%であった。

前期末評価と学年末評価の成績変化の分析によると、1年総合英語が約82%(39人中32人)、1年オーラルコミュニケーションが約69%(同27人)、2年総合英語が約73%(40人中29人)、2年オーラルコミュニケーションが約63%(同25人)の割合で、クラス平均と同等またはそれより良好な成績変化が見られた。

4.2.2 学生アンケートの結果

2010年度では最終回に受講者へ英語寺子屋に関するアンケートを実施した。表4はアンケートの調査項目を、表5から表8はその結果を、開講クラス毎に記したものである。アンケートは、「1:強く思う、2:少しそう思う、3:あまりそう思わない、4:全くそう思わない」の4段階のリッカートスケールを用いた。ただしBの項目は「1:多すぎた、2:ちょうどよかった、3:少なすぎた」、Cの項目は「1:難しすぎた、2:ちょうどよかった、3:少なすぎた」の3段階スケールである。

表4 学生アンケートの項目

A	英語寺子屋を受講して力がついた
B	受講生の人数はちょうどよかった
C	寺子屋のレベルはちょうどよかった
D	寺子屋に出席する前と比べて、授業を真面目に聞く

	ようになった
E	授業の内容を自分で復習している
F	寺子屋に出席する前と比べて、英語を理解できるようになった
G	英語に興味がある
H	寺子屋は希望者のみ出る方がよい
I	勉強に関する自分の現状に危機感を感じている

表5 2年MEアンケート結果 (N=19)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	11	21	0	0	10	0	16	32	68
2	47	68	74	53	58	84	53	42	21
3	37	11	26	42	16	5	21	10	0
4	5			5	16	11	10	16	11

数字は全体に占める割合

表6 1年MEアンケート結果 (N=20)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	20	10	15	10	0	0	5	20	70
2	65	80	80	65	50	70	45	10	25
3	10	10	5	15	40	25	30	65	5
4	5			10	10	5	20	5	0

数字は全体に占める割合

表7 2年CAアンケート結果 (N=16)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	44	0	0	25	6	37	13	25	75
2	44	88	88	63	19	44	20	38	19
3	12	12	12	12	56	19	47	31	0
4	0			0	19	0	20	6	6

数字は全体に占める割合

表8 1年CAアンケート結果 (N=17)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	70	6	18	23	0	35	18	12	94
2	18	94	82	65	29	41	18	0	0
3	12	0	0	12	53	24	41	70	6
4	0			0	18	0	23	18	0

数字は全体に占める割合

表5から表8の結果を分析すると、項目Aの結果から2年MEクラスを除き、その他の3クラスで90%近い学生が英語寺子屋で多少なりとも力がついたと考えている。特に英語科教員が教育アドバイザーを兼ねた1年CAクラスの満足度が高いことがわかる。クラスサイズを問う項目Bについてもちょうどよかったという回答も7割から9割超あ

り、2009年度1年の少人数制よりも、各学年1学科10人程度で開講1クラス20人程度の規模が英語寺子屋に適していると考えられることが判明した。

さらに、項目Dの結果から、寺子屋出席による授業態度の改善を半数以上の学生が自覚していることもわかった。また、復習しているかを問う項目Eと英語に興味があるかを問う項目Gの結果が類似していることは注目に値する。各学年ともにMEクラスの学生は半数以上が授業の復習をし、かつ英語に興味があると答えている。一方、CAクラスの対象者は、およそ7割の学生が復習をあまりせず、英語への興味も薄い。英語への興味を持たせることが今後の課題であろう。

学年による傾向の違いが現れたのは、寺子屋を希望者制にしたほうがよいかを問う項目Hである。2年生はMEクラス対象者の74%とCAクラス対象者の63%が希望者制に賛成している。一方1年生における賛成派は少数で、MEクラス対象者の70%とCAクラス対象者の88%は希望者制に否定的である。この現象は、クラブ活動を休みにくい1年生の場合、寺子屋が最優先という強制力があるほうが参加しやすいことを表していると思われる。

学生の自由記述における英語寺子屋の感想は、「来年もお願いします」(2年ME, 1年ME, 1年CA)、「楽しかった」(1年ME, 2年CA, 1年CA)、「先生の教え方がわかりやすかった」(2年CA, 1年CA)、「どうせなら毎週がよかった」(1年CA)など、好意的な意見が多かった。

また、基礎学力向上プロジェクトが2011年4月に新2年生全員を対象に実施した寺子屋に関するアンケートでは、「英語寺子屋の評価」の項目において寺子屋出席者の約72%が「とても役に立った」または「役に立った」と答え、肯定的な評価の割合が前年度の約40%から大きく増加した。

4.2.3 教育アドバイザーアンケートの結果

2名の教育アドバイザーへは、学生の出席状況、開講時間帯、受講生の人数、受講者の学習態度、教科担当教員からの授業進捗の連絡・授業進捗表についての項目で、記述形式のアンケートを実施した。出席率に関しては、2年生の出席率があまり良くなかったことが、ME担当、CA担当の両アドバイザーに共通した回答であった。1年生の欠席理由として、寮生で風呂掃除や当番などのためという理由があったという報告がなされた。また、欠席する2年生の中には、苦手教科を克服しようという意欲が薄れ、あきらめている学生もいるようだ、との意見が寄せられた。

時間帯については、隔週開講なので致し方ないことであるが、学生が2時間集中力を持続させることは困難であるとの意見であった。また、常勤教員が教育アドバイザーを兼任する場合の問題として、寺子屋開講日(水曜日)に教員会などの会議が入ることが多いため、開講日を変更する

か会議を欠席することとなり、そのための作業が非常に煩雑であること、開講日直前になって研修などが入ることもあり、日程調整等で苦勞することが少なくないこと、開講日を変更した場合も当日忘れてしまう学生が多く、欠席者が増加する傾向にあったこと、などの問題点が指摘された。

受講者数については、1クラス20名程度は通常授業の半数程度で指導が行き届きやすい反面、学生個々の躓きを発見してきめ細かくフォローするまでには至らず、さらに半分程度が望ましい、との意見だった。

学習態度については、英語嫌いの学生への動機付けに苦勞した、特に2年生の場合は居眠りやおしゃべりをする学生が見られた、との意見があった(ME担当)。学習態度の良い学生が多かったが、その一方で一度も出席せずにプリントだけもらって帰ろうとする学生(2年生)もいた、30分を超えると全体的に集中力が落ち始めるという指摘もあった(CA担当)。

授業進捗の連絡および授業進捗表については、毎週進捗を連絡していただき役に立った(ME担当)、初回は連絡があったが、2回目以降からは事前に進捗の連絡が来ることは少なく、寺子屋担当者が電話で個々に確認する機会が多かった(CA担当)、との意見が分かれた。2010年度後期中途に授業担当教員の変更があったため、引き継ぎおよび連絡が不十分になってしまったと考えられる。いずれにしろ、英語寺子屋は通常授業を補完する役割を果たしているため、授業担当教員が常に進捗を意識し、事前にきちんと教育アドバイザーに伝達する重要性を認識しておく必要がある。

その他英語寺子屋実施後の全体的な感想として、両アドバイザーともに共通した意見をまとめると次の通りである。一英語寺子屋での効果は授業で学習したことの補完という目的のため、中学での学習内容まで遡る基礎学習には至らず、効果は限定的である。学生個々の躓きを発見して初期段階から学習し直し、英語力向上につなげるという目的が理想であるが、そのためには時間と人的資源がさらに必要であろう。この意見に対応することが、今後の英語寺子屋の大きな課題となる。

§5 今後の活動に向けて

基礎学力向上プロジェクト英語部会では主に、学力不振者対策として英語寺子屋の取り組みを中心に活動した。初年度の英語寺子屋の活動から生じた課題を検討した上で改善し、2年目ではさらにより良い取り組みを目指した。その結果、出席者はおおむね成績が向上し、学生によるアンケート結果からも満足度が高いことが判明した。当初の第一目標である「単位未修得者を減少させる」という目的はひとまず果たすことができている。ただし、時間的および人的制約から、授業内容の補完にとどまり、躓いている部分まで遡った指導には至っていない。今年度も英語寺子屋は開講予定であるが、これらの問題を少しでも解消する方

向である。学生の集中力を考えて開講時間を90分に短縮し、一方でアドバイザーの人数を3人に増やし、対象者の人数は減らさずにクラスサイズを小さくして細かな指導を目指したい。これまでの2年間で浮かび上がった課題を元にさらに改善された英語寺子屋を開講する予定である。

英語寺子屋の学習支援だけでは支援しきれない学生がいることも判明しているが、このような学生への支援は学校全体で行う必要がある。また、寺子屋はあくまでも学力不振者対策として開講されているが、成績上位者向けに英語力をさらに伸ばす補習または取り組みというものは今後は検討する必要があるだろう。本稿2章で述べたように、英語科教員は既に英語寺子屋開講以前から様々な取り組みを行って呉高専生の英語力向上を目指している。同時に学生の英語学習環境の改善を考え、カリキュラム変更を検討しているところである。今後のさらなる取り組みにおいては英語科教員だけではなく、専門学科の教員や国際交流室との連携が必要となるだろう。英語科だけではなく学校全体の活動として、学生の英語力向上と学習環境の改善をこれからも目指していきたい。

時間多読授業の継続実践による学生の意識変化—1年目と2年目の比較『高専教育』33, pp. 151~156, 2010.

注

- 1) TOEIC 運営委員会 TOEIC Bridge 事務局が発表した2009年度のTOEIC-Bridgeデータ分析によると、平均点は高専1年が113.7点に対し、高校1年は118.6点である。
- 2) 英語の多読による読書スピード向上・理解力向上・英文に対する意識変革については、竹山他(2009)および竹山他(2010)を参照のこと。
- 3) 本校では、Mは機械工学科、Eは電気情報工学科、Cは環境都市工学科、Aは建築学科の略称である。
- 4) 基礎学力向上プロジェクトで実施した学生アンケートについては、佐々木他(2010)を参照のこと。
- 5) 不登校や重度の発達障害など特別な事情がある学生は、本稿における対象者数には含めていない。

参考文献

- 1) 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 TOEIC Bridge 事務局『TOEIC Bridge DATA & ANALYSIS 2009』2010.
<http://www.toEIC.or.jp/bridge/data/document.html>.
- 2) 佐々木伸子、森脇武夫、赤池裕次、笠井聖二、竹山友子、木原滋哉、大和義昭、横沼義雄. 基礎学力向上プロジェクトによる低学年に対する学習支援の試み—寺子屋の取り組みと学生の学習状況について—『呉工業高等専門学校研究報告』72, pp. 73~80, 2010.
- 3) 竹山友子、江口誠、西原貴之、栗原武士、川尻武信. 英語多読授業の実践—2年目を終えて『呉工業高等専門学校研究報告』71, pp. 67~75, 2009.
- 4) 竹山友子、江口誠、西原貴之、栗原武士、川尻武信. 短